



(最首悟「霧とキラリとひとり」より)

霧のなかにキラリと光る
光っている、それは疑えないのだ
あたりはほの明るいのだから
霧がキラリと光るのだ
そっちからそっちへどうしてキラリは移動するのか
霧の光り、光りの霧
霧がたちこめ、きらりと光り、私が歩いている

最首悟さんをしのぶ会「最首悟が居る」

2026年9月19日 土

会場

東京大学 教養学部
(駒場Ⅰキャンパス)
京王井の頭線・駒場東大前駅 東口

第1部 追悼シンポジウム (13号館2階 1323教室) 13:30～16:30 (開場 13:00) *参加費：無料

(申込不要)

講演：山本義隆「最首悟さん追悼にかえて」

ディスカッション：「最首悟さんの『いのち』論に何を学ぶか」

〈登壇者〉今村純子、大谷いづみ、川本隆史、三好春樹

*詳しい情報は、最首塾特設ページにて公開 (裏面 QR コード参照)

実行委員：石橋涼子、市野川容孝、丹波博紀、堂前雅史、藤本寿子、三好春樹、山本義隆

第2部 しのぶ会 (駒場ファカルティハウス・セミナー室) 17:00～19:00

*参加費(飲食代)：5,000円(学生：4,000円) *要申込

第2部
お申し込みは
こちら
(8月30日締切)



主催：最首悟とその仲間たち 有志

お問い合わせ：saishjuku@yahoo.co.jp (最首塾・世話人 丹波博紀)

2026年9月19日（土）、最首悟さんをしのぶ会「最首悟が居る」を開催します。

「最首悟が居る」という名称を選んだのは、最首さんの著作『星子が居る』を想起してのことですが、それ以上に、最首さんが「いる」という言葉を大切にされていたことがあります。

誰かが「いる」とは、とても刹那的なことです。「いる」とは「今ここに」いるということであり、いつかなくなることを抜きにはできません。私たちには、自他のいない時間の方がとても長いのです。それを感じるから、私たちは「あなたといたい」と思い願い、「いなくなること」「いないこと」にせつなさをおぼえます。

私たちがこのしのぶ会の名前を「最首悟が居る」としたのは、「最首さんになりたい」という私たちの思いのあらわれです。この会を、最首悟さんのことをおおいに語り合い、「最首悟と居る」ひとつの場といたしましょう。



最首 悟

[さいしゅ・さとる]

1936年生まれ。小児期喘息により小学校を約4年間休学。

1959年東京大学理科一類入学、1960年6月の国会デモにはクラスから参加。11月第12回駒場祭「樺美智子に捧ぐ」で委員長を務める。

1962年理学部生物学科に進学、大学院理学系研究科を経て

1967年6月より教養学部助手。以後27年間助手職に留まる。

1968年東大闘争に際して助手共闘会議結成に参加、1969年1月の「朝日ジャーナル」を皮切りに一般メディアでの発言を始める。

1969年11月、西村秀夫、折原浩らと解放連続シンポジウム「闘争と学問」を始める。1976年12月より不知火海総合学術調査団

に参加、1981年より第二次調査団団長、以後も水俣への関わりを続ける。一方1976年にダウン症の第四子が出生し、障害児者に関する発言も続ける。また、1977年より駿台予備校で教え始める。

1994年東京大学退職、1997年より地域作業所「カプカプ」運営委員長。恵泉女学園大学特任教授を経て、2003年より和光大学人間関係学部教授、2007年同大名誉教授。2018年より神奈川新聞ニュースサイト「カナロコ」に、相模原障害者施設殺傷事件の植松聖被告（のち死刑囚）への手紙を連載。

2026年2月8日死去。享年89歳。

最首悟が居る

